



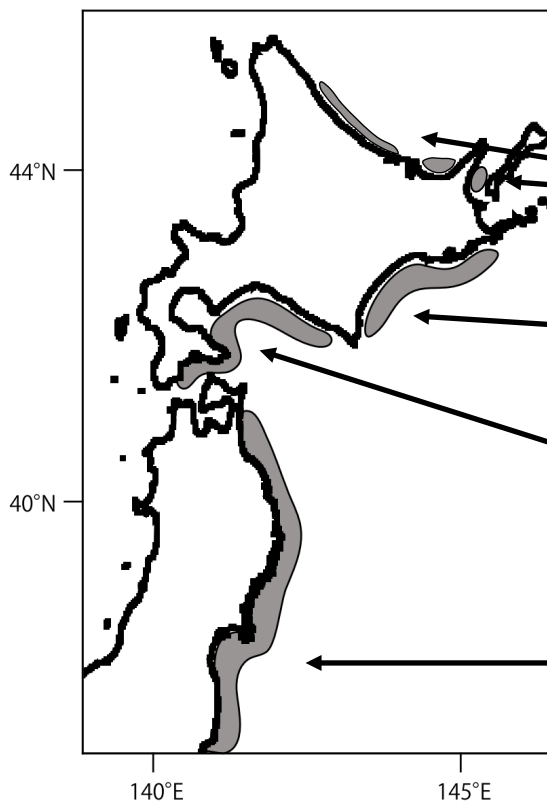
2022年9月30日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

## 2022年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し（2022年10月～12月）のポイント



スルメイカの来遊量は、道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海では前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域および常磐～三陸海域では前年並と予測される。

根室海峡～オホーツク海：  
来遊量は前年を下回る。  
魚体は前年並。

道東太平洋海域：  
来遊量は前年を下回る。  
魚体は前年並。

津軽海峡～道南太平洋海域：  
来遊量は前年並。  
魚体は前年並。

常磐～三陸海域：  
来遊量は前年並。  
魚体は前年並。

### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜） 上原

浮魚資源部（横浜） 大島、岡本

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

# 2022年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

## 今後の見通し（2022年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網、刺し網

対象魚群：主に冬季発生系群（2022年級群）

### 1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は散発的となる。
- (3) 魚体：前年並

### 2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網、刺し網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期は前年と同様に11月までとなる。
- (3) 魚体：前年並。

### 3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

### 4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

## I 予報の説明

2022年8月～9月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査<sup>1)</sup>の結果(図1～3;以降、いか釣り調査と総称する)、および8月(一部9月を含む)の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、道東太平洋海域と根室海峡～オホーツク海域では前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域と常磐～三陸海域では前年並と予測される。

### 1. 道東太平洋海域(いか釣り、底びき網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域(42°N以北、143°E以东)では漁獲が無く、本年調査が実施された3点と同一調査点においては前年も漁獲無しであった(前年は全10点で調査実施)(図1、2)。道東主要港における初水揚げは前年よりも遅く、8月の小型いか釣り船CPUE(1日1隻当たり水揚げ量)は前年を下回った(表1)。9月上旬以降のCPUEも前年を下回っている。以上のことから、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回り、漁場形成は散発的になると予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における9月上旬までの入尾数別水揚げ情報<sup>2)</sup>、前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

### 2. 根室海峡～オホーツク海域(いか釣り、底びき網、定置網、刺し網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以东(144.4°E以东)では漁獲が無く、本年調査が実施された2点と同一調査点においては前年も漁獲無しであった(図1、2)。北方四島周辺の太平洋側の海域における8月上旬以降の平均海表面水温<sup>3)</sup>および10月までの予測水温(図4)<sup>4)</sup>は前年より高いため、スルメイカが太平洋からオホーツク海へ前年より回遊しやすい環境であると考えられるものの、釧路～羅臼周辺海域における9月中旬までの漁獲量は前年を大きく下回ったまま推移している(表1)。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される。オホーツク海沿岸の10月の予測水温は前年並であるため(図4)、漁期は前年と同様の11月までと予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における9月上旬までの入尾数別水揚げ情報<sup>2)</sup>から、前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

### 3. 津軽海峡～道南太平洋海域(いか釣り、定置網)

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域(41°N以北、143°E以西)におけるいか釣り調査の平均CPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は前年並であった(図1、2)。函館港と大畑港での8月の小型いか釣り船CPUEは前年並であった(表1)。9月上中旬のCPUEは、函館港では前年を上回り、大畑港と苫小牧港では前年並、浦河港では前年を下回った。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年並と予測される。

魚体サイズについては、いか釣り調査の結果(図3)から前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

#### 4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査では前年同様に漁獲が無かった（図1、2）。青森県、岩手県、宮城県の主要港での8月の小型いか釣り船 CPUE は前年を上回った（表1）。以上のことから、常磐～三陸海域における群の分布量は前年を上回ると考えられる。一方で、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。したがって、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年並と予測される。

魚体サイズについては、宮城県における8月の水揚げは前年より大きく、岩手県では前年よりやや大きかった（図5）。一方、当該海域において最も水揚げの多い青森県における8月、9月上旬の水揚げは前年より小さかった（図6）。以上のことから、当該海域全体においては前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

- 1) 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。
- 2) 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計。
- 3) 気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温  
(<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/kaiyou/engan/engan.html>)
- 4) 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム (FRA-ROMSII) による予測水温 (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)

## II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.33尾であり、前年（0.38尾）並であった（図1、2）。海域別に見ると、津軽海峡～道南太平洋周辺海域では1.6尾であり、前年（1.9尾）並であった。三陸周辺海域では前年同様に本年も漁獲が無かった。道東周辺海域では漁獲が無く、前年（0.1尾）を下回った。ただし、本年の調査が実施された3点と同一調査点に限定すると、前年も漁獲無しであった（前年は全10点で調査実施）。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域における漁獲物の外套背長組成の最頻値は19 cmにあり、前年（19 cm）並であった（図3）。道東周辺海域および三陸周辺海域では漁獲が無かったため前年との比較はできない。

## III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量<sup>1)</sup>は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2021年は1.2万トンであった（図7）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2021年は0.6万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2021年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は2.0千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では2.1千トン、道東太平洋海域では0.4千トン、根室海峡～オホーツク海では1.3千トンであった（図8）。また、千葉県以南の海域での漁獲量は51トンであった。2017年～2021年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では34%、津軽海峡～道南太平洋海域では67%、道東太平洋海域では86%、根室海峡～オホーツク海では117%、千葉県以南の海域では196%であった。

2022年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚げ量<sup>2)</sup>（生鮮：速報値、一部未集計）は1.5千トンで、前年（1.4千トン）並であった。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では1.3千トンで、前年（0.7千トン）を上回った。津軽海峡～

道南太平洋海域の主要港の水揚量は一部集計中だが、現状では0.2千トンで、前年（0.4千トン）を下回っている。道東太平洋海域の主要港では15トンで、前年（328トン）を下回った。根室海峡～オホーツク海では1トンで、前年（15トン）を下回った。千葉県以南の主要港では40トンで、前年（14トン）を上回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

- 1) 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図7、図8を含めた漁獲量は全て推定値である。
- 2) 水揚量は単純積み上げた数値。

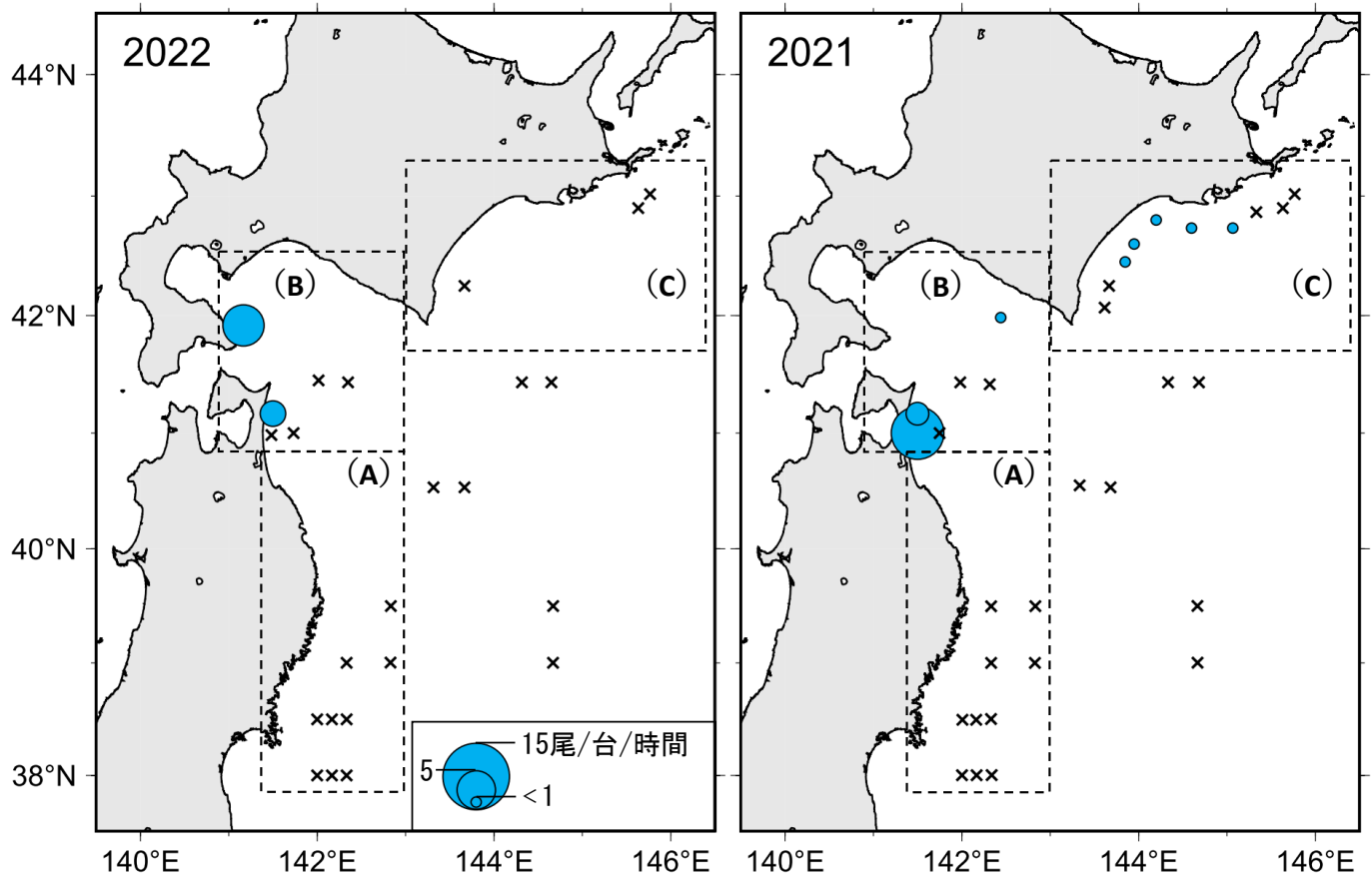


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2021年と2022年の8月～9月のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

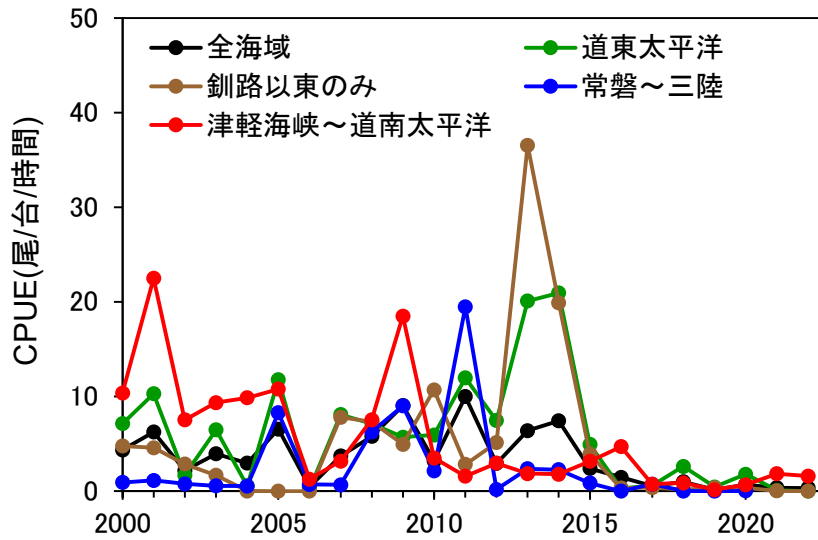


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

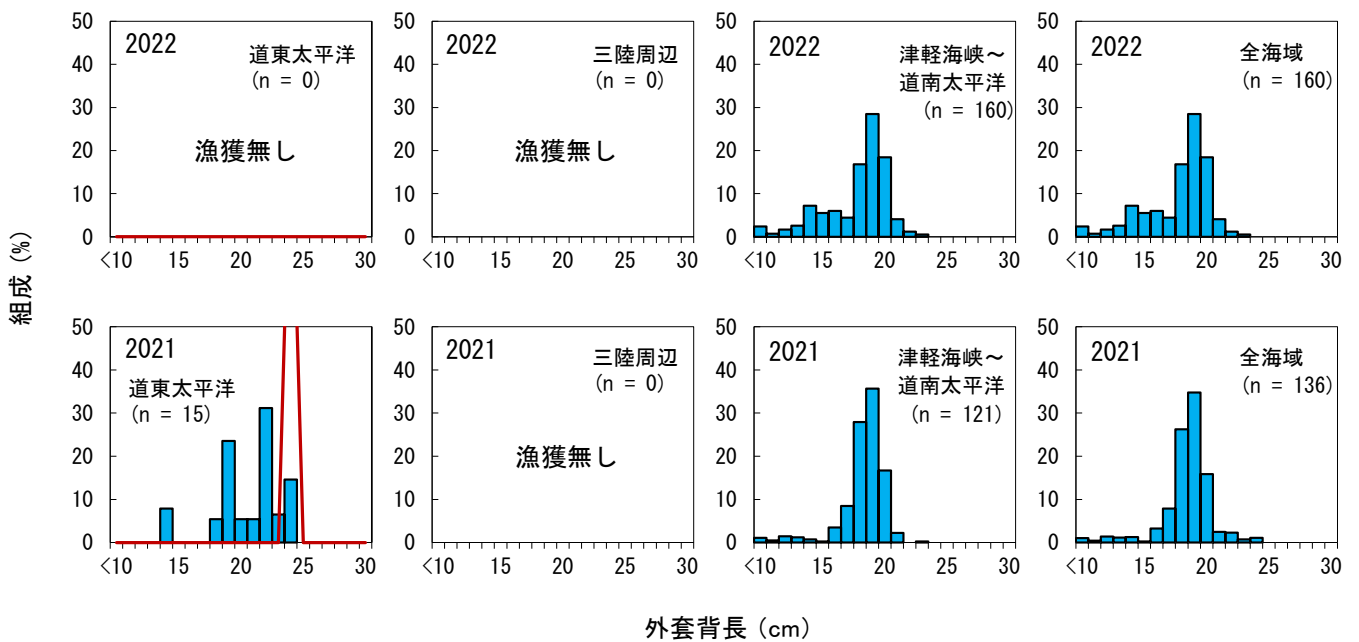


図3. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

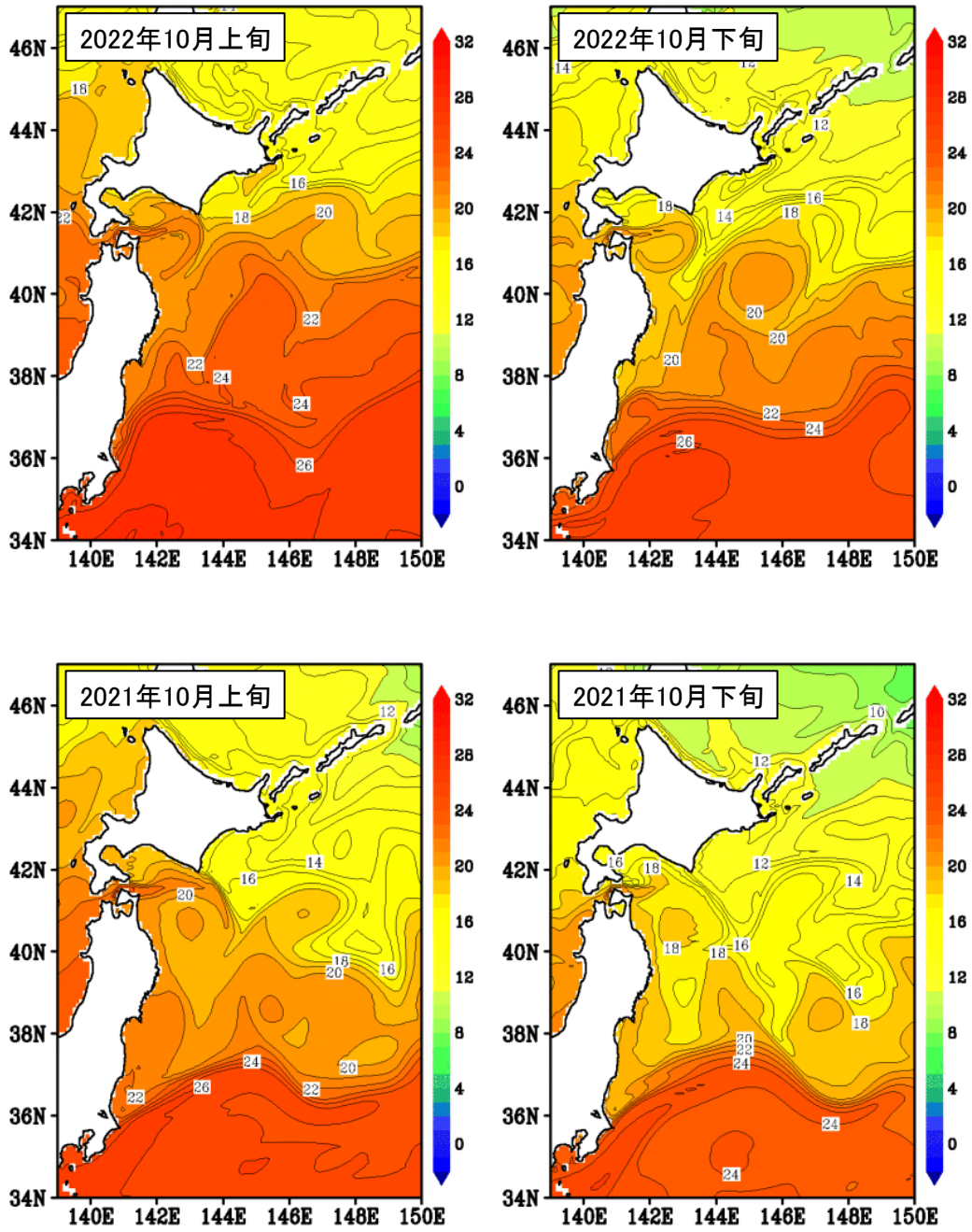


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2021年、2022年の10月上旬と下旬の海表面水温  
2022年は予測水温であり、2022年9月27日にHPより取得した



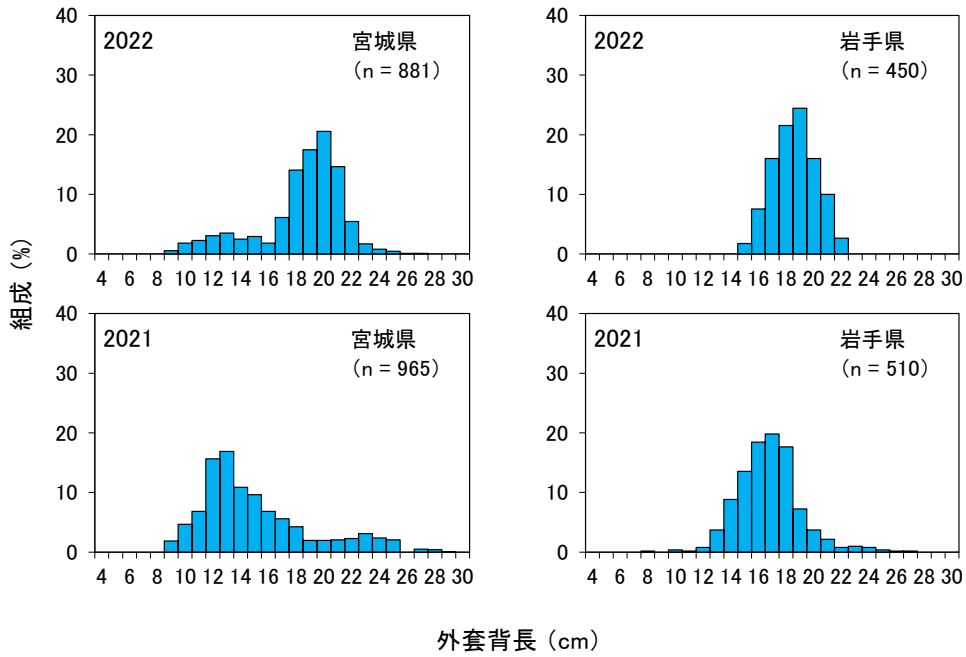


図5. 2021年、2022年の8月に宮城県（底びき網）と岩手県（定置網）で水揚げされたスルメイカの外套背長組成

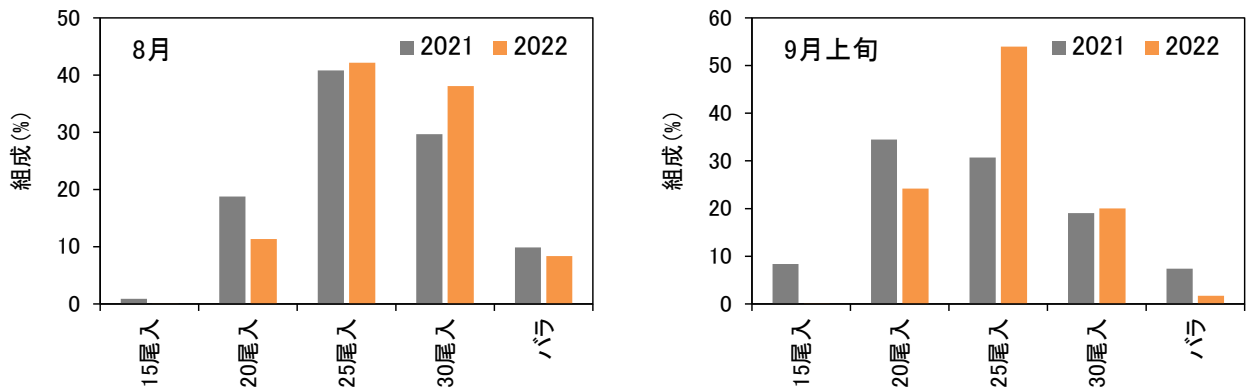


図6. 2021年、2022年の8月および9月上旬に青森県（釣り）で水揚げされたスルメイカの入尾数別水揚げ箱数の組成  
1箱当たりの重量は約6kgであり、入尾数が小さい（横軸の左側）ほど魚体サイズは大きい  
漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計

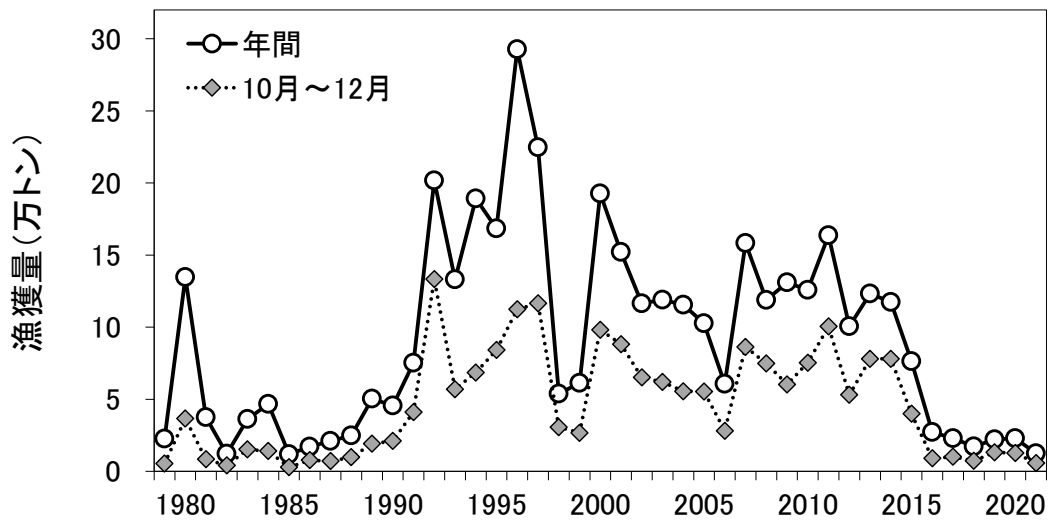


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

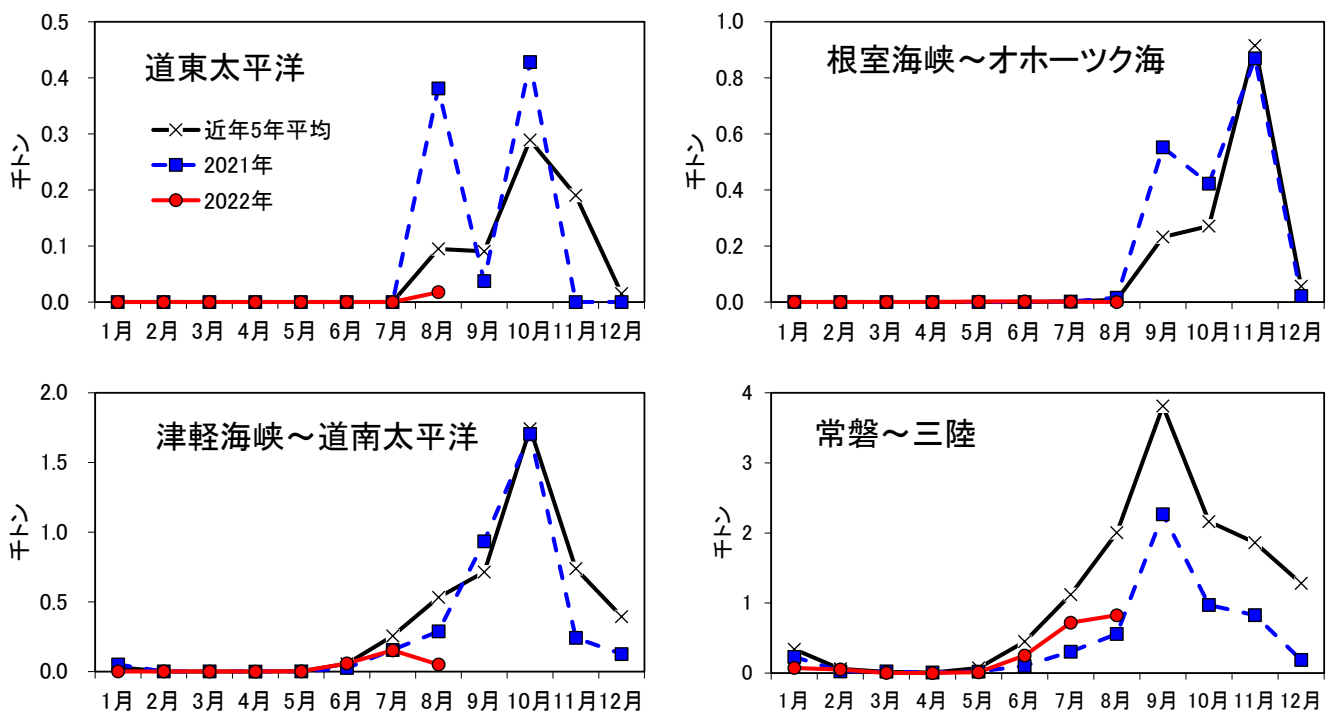


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）  
 近年5年平均は2017年～2021年の平均  
 （いか釣り・定置網・底びき網・まき網・刺し網）

表1. 漁況経過（2022年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	太平洋側での初水揚げ日は8月4日（花咲港、釣り）で、前年（根室港で7月19日、定置網）より遅かった。 道東主要港での釣りによる8月の水揚量は15トンで前年（328トン）を上回り、CPUEは前年比22%であった。9月上中旬の水揚量とCPUEはともに前年下回った。一方、同時期の底びき網による水揚量は前年を上回った。 羅臼港では、9月20日時点で初水揚げはまだない（前年は8月27日に釣りで初水揚げ）。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚量は31トンで前年比86%、CPUEは前年比88%であった。9月上中旬のCPUEは前年を上回った。 浦河港では8月29日に釣りによる初水揚げがあり、前年（9月1日）とほぼ同時期であった。9月上中旬の釣りによるCPUEは前年を下回った。 苫小牧での初水揚げ日は9月5日で、前年（8月24日）より遅かったものの、9月中旬まで漁獲量およびCPUEは前年並であった。 南茅部での定置による7月の水揚量は48トンで前年比62%であった。
青森	大畑港での釣りによる8月の水揚量は12トンで前年比81%、CPUEは前年比104%であった。9月上中旬のCPUEは前年並であった。 白糠港での釣りによる8月の水揚量は108トンで前年比135%、CPUEは前年比130%であった。9月上旬のCPUEは前年を上回った。 八戸港での釣りによる8月の水揚量は238トンで前年比211%、CPUEは前年比176%であった。9月上旬のCPUEは前年を下回った。 八戸港でのまき網による8月の水揚量は90トンで前年比112%であった。9月上旬の水揚量は前年を上回った。 八戸港での底曳網による9月上旬の水揚量は前年を上回った。
岩手	岩手県主要港での釣りによる8月の水揚量は67トンで前年比269%、CPUEは前年比283%であった。定置網による8月の水揚量は41トンで前年比396%であった。また、9月上中旬の定置網による水揚量は前年比116%であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる8月の水揚量は1.9トンで前年比90%、CPUEは前年比218%であった。定置網による8月の水揚量は0.7トンで前年比215%であった。底びき網による8月の水揚量は7トンで前年比82%であった。 石巻港での底びき網による9月上中旬の水揚量は前年を下回った。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	主要港での釣りによる8月の水揚げはなかった。定置網による8月の水揚げは1.1トンで前年比318%であった。
神奈川	間口港における釣りによる8月の水揚げは198kgで前年比202%、CPUEは前年比138%であった。
静岡	仁科港での釣りによる8月の水揚量は88kgで前年比41%、CPUEは前年比154%であった。
三重	奈屋浦港でのまき網による8月の水揚量は165kgであった（前年は水揚げ無し）。
和歌山	すさみ港での釣りによる8月の水揚量は5トンで前年比97%、CPUEは前年比132%であった。
高知	釣りによる8月の水揚げは14トンであった（前年は水揚げ無し）。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚量

## 参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p> <p>岩手県水産技術センター</p> <p>宮城県水産技術総合センター</p> <p>福島県水産資源研究所</p> <p>茨城県水産試験場</p> <p>千葉県水産総合研究センター</p> <p>神奈川県水産技術センター</p> <p>静岡県水産・海洋技術研究所</p>	<p>三重県水産研究所</p> <p>和歌山県水産試験場</p> <p>高知県水産試験場</p> <p>一般社団法人 漁業情報サービスセンター</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
---	---